Eu-007 **会場：402** **時間：6月7日　10:45-11:00**

昼間側カスプ/クレフト域における可視オーロラとSuperDARN HFレーダーとの同時観測

Simultaneous signatures of SuperDARN radars and optical auroras observed near the dayside cusp/cleft region

佐藤　夏雄[1], 村田　洋三[2], 山岸　久雄[3], 行松　彰[4], 菊池　雅行[1], 江尻　全機[1], 岡田　雅樹[5], 田口　真[1], 岡野　章一[6], 楊　恵根[7], 劉　瑞源[8], Hongqiao Hu,[9], SuperDARN Group PIs　R.A.Greenwald

Natsuo Sato[1], Yozo Murata[2], Hisao Yamagishi[3], Akira Sessai Yukimatu[4], Masayuki Kikuchi[1], Masaki Ejiri[1], Masaki Okada[5], Makoto Taguchi[1], Shoichi Okano[6], Huigen Yang[1], Ruiyuan Liu[7], Hongqiao Hu,[8], SuperDARN Group PIs R.A. Greenwald

[1] 極地研, [2] 総研大, [3] 極地研・超高層, [4] 極地研超高層, [5] 極地研究所, [6] 東北大・理, [7] 極研, [8] 極地所, [9] 中国極地研

[1] NIPR, [2] Department of Polar Sci.,the Graduate Univ. for Advanced Studies, [3] Upper Atmos. Phys., Natl. Inst. Polar Res., [4] UAP, NIPR, [5] National Insititute of Polar Research, [6] PPARC, Tohoku Univ., [7] PRIC, [8] Polar Reserch Institute of China

Syowa East と Kerguelen HF レーダーの視野は中国中山基地上空をカバーしている。中山基地には、日中共同観測・研究としての、全天TVカメラ、全天オーロラ・イメージャ、掃天フォトメータ、イメージングリオメータ、磁力計、デジタルアイオノゾンデなどが設置されている。また、Syowa South, Halley, Snanae HF レーダーの視野下には、極地研究所の多色全天イメージャが稼働している米国南極点基や米国無人観測点（AGO）が配備されている。本講演では、1999年5月18日の昼側で観測された可視オーロラとHFレーダーとの相関関係の詳細について報告する。

国際 SuperDARN レーダー網は、両極域の広い範囲を速い時間分解能で、プラズマ運動を観測することが可能である。このSuperDARNレーダーとその視野下での可視オーロラとの同時特別観測を企画することにより、速い時間分解能でのカスプ域オーロラダイナミックスを解明することを目的としている。この目的のために、1999年と2000年の南極域での可視オーロラ観測が可能な5月～8月の新月前後の期間を選んで実施した。

Syowa East と Kerguelen HF レーダーの視野は中国中山基地上空をカバーしている。中山基地には、日中共同観測・研究としての、全天TVカメラ（白黒）、全天オーロラ・イメージャ（557.7 nm/630.0 nm）、掃天フォトメータ(427.8 nm/557.7 nm/630.0 nm)、イメージングリオメータ、磁力計、デジタルアイオノゾンデなどが設置されている。また、Syowa South, Halley, Snanae HF レーダーの視野下には、極地研究所の多色全天イメージャが稼働している米国南極点基や米国無人観測点（AGO）が配備されている。なお、中山基地と南極点基地はカスプ/クレフト域緯度の75度付近に位置し、MLTが約6時間異なっている。また、中山基地の共役点はスバールバルに位置している。

本講演では、1999年5月18日の昼側で観測された可視オーロラとHFレーダーとの相関関係の詳細について報告する。この日の主な特徴は、1）中山基地と南極点基地との同時可視オーロラ画像データが得られた、2）極向きの強いプラズ・マフロー・バーストがSuperDARNレーダーで観測された（特に、北半球側が強い）。